

ふじさんミュージアム企画展

ねとむ#02
「神聖」
甲斐県

展示目録

会期：2024年10月19日（土）-2025年1月20日（月）

主催：ふじさんミュージアム

企画：合同会社 OULO

ディレクター：高須賀活良

グラフィックデザイン：浦川彰太

映像：株式会社地域と映像

読み手：芦澤洋平（芦澤養蚕）

篠原武（ふじさんミュージアム学芸員）



甲斐絹をよむ 公式 Instagram

はじめに

本展は、2023年に富士吉田市で開催された「FUJI TEXTILE WEEK 2023」のデザイン展「甲斐絹をよむ」の続編として開催されます。前回に引き続き、幻の織物「甲斐絹」に焦点を当て、その背後にある美や文化、人々の営みを探求しますが、今回は特にその素材である絹糸を生み出す「蚕」に注目します。絹糸を生み出す蚕は、一般的に「天」の「虫」と書かれますが、養蚕が盛んだった江戸時代のお札には「神」と「虫」を合わせて「神虫」と表記されることもありました。なぜこの小さな虫が神と結びついたのでしょうか？その歴史を紐解いていきましょう。

絹は、6000年以上前に古代中国で始まった養蚕の歴史から生まれた美しい繊維素材です。蚕という小さな虫と人とが織りなすこの共同作業は、シルクロードを伝い、日本にもその技術が伝わり、ここ山梨でも独自の絹織物文化を育んでいきました。

本展では、その6000年にわたる「虫と人との約束」とも言える関係を再解釈し、絹が持つ生命のつながりを浮き彫りにしていきます。今回は、養蚕農家の芦澤洋平氏やふじさんミュージアム学芸員であり考古学研究者でもある篠原武氏を「読み手」として迎え、多角的な視点から絹と甲斐絹の歴史や意味を紐解いていきます。絹に込められた命の物語を読み解くことで、甲斐絹が過去の遺産としてだけでなく、未来へと続く生きた織物であることを感じていただけることでしょう。

過去、現在、未来をつなぐ「絹」という生命の素材を通じて、織物を「読む」という新たな体験をお楽しみください。

甲斐絹とは

甲斐絹は、撚りをかけない極細の糸で織りあげる、薄くて張りのある絹織物です。特に高度な手織り技術を駆使して、縞柄や絵柄を層状に織り上げた甲斐絹は「絵甲斐絹」と呼ばれ、独特な光沢と奥行きのある絵柄が物語性を持ち、主に羽織の裏地として明治から昭和初期にかけて高い人気を誇りました。しかし、現代では残念ながら甲斐絹の技術は継承されておらず、現存する資料もわずかしかなかった。研究は進められていますが、実際の作り方は完全には解明されておらず、まさに幻の織物となってしまいました。

この美しく緻密に織られた絵柄や独特な光沢を持つ甲斐絹ですが、これらの特徴を生み出すのは、単に織る技術だけではなく、甲斐絹の素材である絹糸を作り上げる技術や、その原料となる養蚕の世界も、忘れてはならない要素です。なめらかな光沢や繊細な表現は、非常に細い絹糸だからこそ実現できるものであり、甲斐絹の魅力を引き出す重要な要因となっていました。



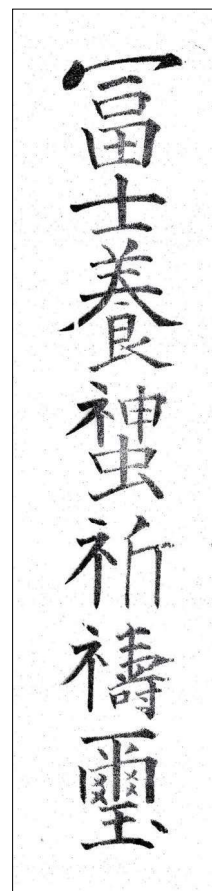
甲斐絹と信仰

養蚕とは、蚕を飼育し、サナギになる際に吐き出す糸で繭を作る営みです。諸説ありますが、蚕は約 6000 年前の古代中国で家畜化され、その後、世界各地に広がっていきました。日本では弥生時代に養蚕が始まったとされています。3 世紀に書かれた『魏志倭人伝』には、日本から中国への貢物の中に絹織物が含まれていたと記されており、当時の日本での養蚕を示す記録が残っています。山梨県では平安時代にはすでに養蚕が行われていましたが、本格的に発展したのは江戸時代以降です。当時の養蚕は自然環境の影響を強く受け、春に季節外れの霜が降りて桑の葉が枯れたり、寒さで蚕が死んだりすることが多く、養蚕の成功はその年の天候など、人の力では及ばない要素に左右されました。そのため、人々は様々な神々を信仰し、養蚕の成功を祈願していたのです。

この人々の祈りや願いは、この地域でも江戸時代から富士山の神として信仰されてきた木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）にも反映されています。木花開耶姫命は、農業、酒造、安産、火伏など様々なご利益があるとされ、その一つとして養蚕の守護神としても崇拝されていました。養蚕に携わる人々は、夏になると富士山を信仰する人々とともに登山を行い、道中で養蚕守護を願い、養蚕守護のお札を持ち帰ることで蚕の健やかな成長を祈っていました。



養蚕を守護する木花開耶姫命
おふだ「木花開耶姫命」の掛軸
館蔵



養蚕守護の神札
おふだ「富士養蚕祈禱壺」と版木
館蔵（御師団屋旧蔵）

繭から糸へ

繭が収穫されると、次は絹糸を作る工程に入ります。繭一つからとれる繊維の長さは驚くことに1km以上にもなりますが、その繊維は非常に細く、一本では糸として使用できません。そのため、まず繭をお湯で煮て繊維を柔らかくほぐし、数個の繭から出てくる繊維を束ねて、一本の糸にします。

製糸の工程

生繭搬入 なままゆはんにゅう

農家で生産された生繭は製糸工場に運び込まれます。

乾繭 かんけん

生繭を乾燥して長期の貯蔵に耐えるようにします。

貯繭 ちょけん

乾繭は倉庫に貯蔵し繰糸する量だけ取り出します。

選繭 せんけん

生糸品質を損ねる繭や繰糸にむかない繭を除きます。

煮繭 しゃけん

繭を煮て繭糸のほぐれをよくします。

繰糸 そうし

数粒の繭からほぐれる糸を抱合させて1本の生糸にします。

揚げ返し あげかえし

繰糸を終えた小枠から生糸を乾燥しながら大枠に巻き取ります。

かせねじづくり

かせが乱れないようにねじりを加えて整えます。

生糸出荷 きいとしゅっか

ねじづくりした生糸を輸送に便利な荷姿（かつ）にして出荷します。

蚕から繭へ

絹糸を作るには、まず蚕の繭を作る必要があります。これは、生き物である蚕を育てる「養蚕」と呼ばれる作業です。広大な桑畑で無農薬で育てた桑の葉を毎日与え、蚕が繭を作るまでの約1か月、つきっきりで世話をします。5月中旬から10月中旬までの間、この工程を数回繰り返します。蚕は天候や病気に弱く、飼育には時間と手間がかかるため、最適な環境で大切に育てられます。時には、飼育者が住む環境よりも良い環境で蚕を育てることも珍しくありませんでした。

養蚕の工程

掃立 はきたて

卵からかえった蚕（蟻蚕）を飼育場所に移し、初めて桑を与えることを掃立といいます。

給桑 きゅうそう

蚕に桑を与えることを給桑といいます。昔は桑の葉を摘んで与えていましたが、現在では桑の葉を枝につけたままで給桑しています。

除沙・拡座 じょさ かくざ

蚕が食べ残した桑や、蚕の糞などを取り除くことを、除沙といいます。また、蚕が大きくなるにつれて、飼育場所を拡げてやらなければなりません。このことを拡座といいます。

上簇 じょうぞく

5齢の蚕は、成長して糸を吐く準備が整うと、次第に桑を食べなくなります。このようになった蚕を熟蚕と呼び、熟蚕を繭づくりの場所（簇・もず）に移すことを上簇といいます。

収繭 しゅうけん

簇から繭をかきとることを収繭といいます。収繭した繭は、製糸原料として不適切な繭を取り除いてから、製糸業者などに販売されます。

神様に願う、蚕の健やかな成長

富士山信仰と養蚕

富士山の神として江戸時代から信仰されてきた木花開耶姫命は、農業・酒造業・安産・火伏など様々な御利益があるとされましたが、その1つが養蚕守護でした。養蚕にたずさわる人々は、養蚕が無事に行えるよう祈願するため、夏になると富士山に登りました。登山口である富士吉田の^{かみよしだ}上吉田村に着くと、神職の資格をもつ^{おし}御師が営む宿で1泊し、屋敷内にある木花開耶姫命を祀る神殿で登山前のお祓い（不浄祓）を受け、養蚕守護のおふだを御師からもらい受けました。おふだには大きく2種類あり、1つは木花開耶姫命の姿を描き養蚕守護などの御利益を記したものの、もう1つは「養蚕満足」や「養蚕守護」という文字が記されたものです。前者は床の間などに掲げて祀り、後者は神棚や養蚕の部屋に祀りました。

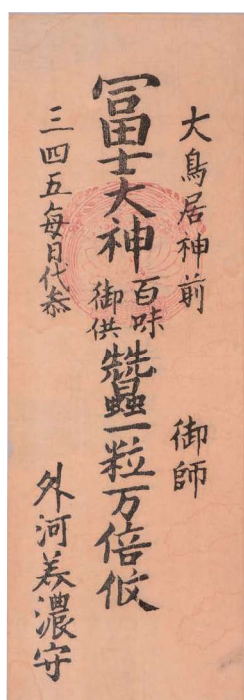
当時、富士山に登る人の多くは、村ごとに組織されていた富士講（富士山を信仰し登山する団体）に加わっていました。吉田口と呼ばれる上吉田村から登るのは、関東甲信地方の富士講で、その数は10,000以上あったと推定されます。これらの地域の多くで盛んだったのが養蚕でした。御師は、富士山の開山期以外は、富士講の人々が住む地域を3～6ヶ月かけて廻る旦廻り（檀家廻り）を行いますが、この際にも養蚕守護のおふだを配り、「棚祭」（または「蚕祭」）という養蚕守護の御祈禱を行いました。



養蚕を守護する木花開耶姫命・稚産靈神・埴山姫命
おふだ「木花開耶姫命・稚産靈神・埴山姫命」掛軸
館蔵（上吉田の上宿の村上講旧蔵）



養蚕を守護する木花開耶姫命
おふだ「木花開耶姫命」の掛軸
館蔵



養蚕守護の神札
おふだ「富士大神百味御供蚕一粒万倍攸」
館蔵

かぐや姫 = 金色姫 = 木花開耶姫命

蚕影信仰と養蚕

蚕の神として関東甲信地方から東北南部で信仰されてきたのが蚕影山こかげさん大権現です。富士吉田では、上暮地の白糸の滝の蚕影神社や大明見の小室浅間神社の蚕影社などが知られています。蚕影信仰は16世紀以降に広まりますが、その中心となったのが茨城県に鎮座する複数の蚕影神社です。これらの蚕影神社や隣接する神宮寺が広めたのが、蚕影山大権現として祀られてきた金色こんじきひめ姫の物語です。

インドの王の娘である金色姫は、継母の悪だくみにより4度の苦難にあいます。いずれも助かりますが、王は姫の行く末を案じて、桑の木に船に乗せて海に流します。現在の茨城県にたどり着いた姫は、漁師夫婦に助けられますが、病に倒れ亡くなり蚕になります。夫婦が蚕に桑の葉をあげると次第に成長し、繭になりました。そして、漁師は筑波山の神に繭から絹糸にする方法を授かりました。それからのち、天皇の娘であるかぐや姫は筑波山の神となり、初めて絹で衣服を織りました。かぐや姫は、自分は金色姫の生まれ変わりであると打ち明けた後、富士山に飛び立ち、富士山の神となりました。

このように養蚕を伝えた金色姫とかぐや姫は、起源が同じ神として信仰されていきます。17世紀以降、富士山の神はかぐや姫ではなく木花開耶姫命とされるようになっていくと、木花開耶姫命も金色姫と同じ神として信仰されるようになり、養蚕守護の神となっていきます。



養蚕を守護する金色姫
掛軸「金色姫」
館蔵



養蚕を守護する木花開耶姫命
おふだ「木花開耶姫命」の掛軸
館蔵

馬を愛した娘が蚕になった物語

神馬社と養蚕

北口本宮富士浅間神社の神馬社しんめしゃはオウマサンと呼ばれ、農耕の神、養蚕の神とされました。人々は寒申祭かんざるさい（寒の入りから数えて最初の申の日）のときに神馬社に参拝し、養蚕守護のおふだをもらい受けました。また、馬のワラジを2つ供え、代わりにそこから1つを借りていきました。この馬のワラジを蚕室の入口に吊るしておくで蚕が当るとされ、翌年にはまた2つのワラジを供えて礼としました。神馬社には寒申祭だけでなく、5月の初申祭はつざるさいの時にも参拝者が訪れました。

このように馬と養蚕が深く結びつくようになることに大きく影響したのが、4世紀頃に中国で成立した『搜神記』所収の物語です。それは、ある家の娘に飼馬が思いを寄せ、それを知った父親が馬を殺し皮をはいでしましますが、娘はその皮に包まれて遠くへ飛び去ってしまい、数日後に大樹の枝の間で、娘と馬が蚕と化していたという話です。この物語が日本で広まり、各地域で馬と娘と蚕の話が伝承されるようになったとされます。東北地方でも類似の物語が伝わっており、娘と馬はオシラ神になったとされ、各家で厚く信仰されてきました。なお、市内では昭和30年代（1955～1965）まで、馬は農耕や運搬のために多くの家で飼われ、ウマヤは屋外か屋内の土間にありました。養蚕も屋内の土間・座敷・屋根裏を中心に行われてきました。このように人と馬と蚕が共に生活してきたことが、馬と蚕を結びつけたのかもしれませんが。



養蚕を守護する神馬社
小室浅間神社の神馬社のおふだ「養蚕守護」
館蔵



馬沓（うまくつ）
馬の草鞋です。蹄鉄が普及するまで、馬の蹄を保護するために使われてきました。



養蚕を守護する神馬社
北口本宮富士浅間神社の神馬社の版木「養蚕満足」
館保管（北口本宮富士浅間神社蔵）



養蚕を守護する神馬社
北口本宮富士浅間神社の神馬社のおふだ「養蚕守護」
館蔵（外川家旧蔵）

女性の幸福を祈る蚕の詩

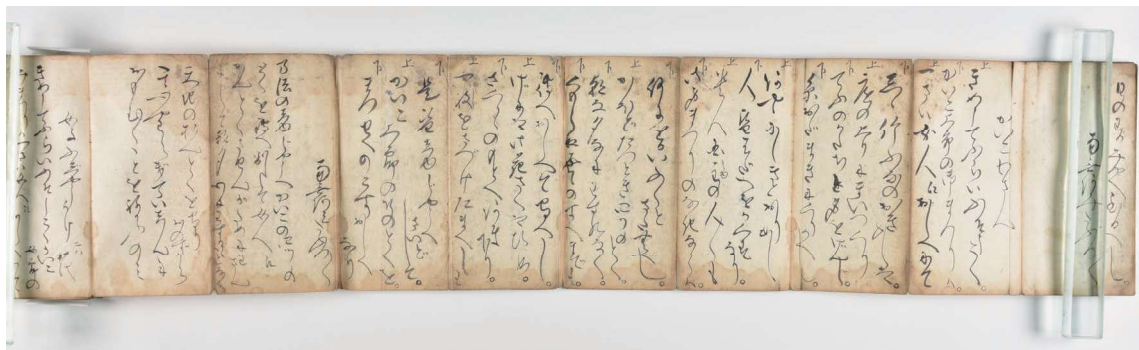
富士行者と養蚕

ふじぎょうじゃ
富士行者は、富士山で修行を積み、富士山信仰の教えを広めた人たちです。その
教えの中で、富士山の祭神として厚く信仰されてきたのがモトノチチハハ（または、
せんげん
仙元大菩薩）です。モトノチチハハは全ての命の源とされましたが、生み出された
ものの中で富士行者が最も大切にしてきたのが米と蚕でした。

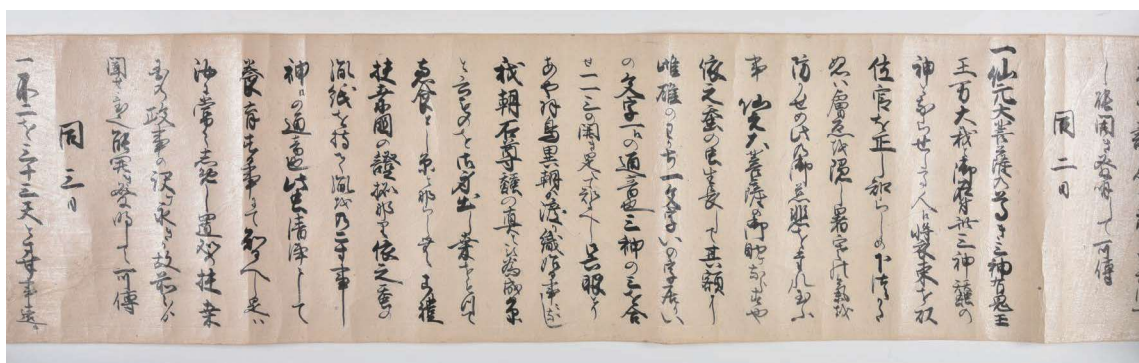
富士山信仰を広めたことで知られる富士行者6世の食行身禄じきぎょうみろくは、享保18（1733）年
に富士山八合目のえぼしいわ烏帽子岩において31日間の断食修行をした末に、神仏の使いとなっ
て富士山信仰の教えを広めることを願って亡くなります。この時に説いた教えを弟
子たちがまとめた『三十一日の巻』には、次のように記されています。

「仙元大菩薩が生み出した米は桑より見いだされ、桑に変えて米によって人々を助け
るようになった。これが扶桑国の始まりである。」「蚕の神より賜る糸によって、我
が身の禄政（生き方）を改め、曲がれば真っすぐにして、心をよく磨き、身を真っ
すぐにして人間の鏡となり、人間の再興の助けになる人は、仙元大菩薩のご意向に
叶う。」

食行身禄の死後、三女の一行花はその跡を継ぎ、父の教えを守り伝えるために尽
力しました。花が残した和賛に「蚕和賛」があります。そこには、扶桑国である日
本の蚕を育てることは女性のなりわいであることや、この和賛を心の中で忘れるこ
となく大切にすることが、女性の幸福につながると記されています。



富士行者と養蚕守護
「富士講七世伊藤花子御伝」
館蔵



富士行者と養蚕守護
「三十一日の巻」
館蔵

主要参考文献

- 伊藤智夫 1992 『ものと人間の文化史 68-I 絹 I』
- 伊藤智夫 1992 『ものと人間の文化史 68-II 絹 II』
- 神立孝一 1987 「近世吉田地方における絹織業について」『富士吉田市史研究』2
- 齋藤康彦 1987 「郡内機業地帯の産業構造の地域的特質」『富士吉田市史研究』2
- 齋藤康彦 1990 「郡内機業地帯の産業構造の地域的特質」『富士吉田市史研究』5
- 齋藤康彦 1998 「鷺見基助『山梨県機織業調査報告書』」『富士吉田市史研究』13
- 沢辺満智子 2020 『養蚕と蚕神－近代産業に息づく民俗的想像力』
- 竹谷鞆負 2006 『富士山の祭神論』
- 福島県立博物館 1998 『天の絹絲－ヒトと虫の民俗誌－』
- 富士吉田市教育委員会 1984 『ふるさとの形－富士吉田の民具－』
- 富士吉田市史編さん室 1986 『富士吉田市史民俗調査報告書第5集 上暮地の民俗』
- 富士吉田市史編さん室 1987 『富士吉田市史民俗調査報告書第6集 新倉の民俗』
- 富士吉田市史編さん室 1988 『富士吉田市史資料叢書4 村明細帳』
- 富士吉田市史編さん室 1988 『富士吉田市史民俗調査報告書第8集 大明見の民俗』
- 富士吉田市史編さん室 1989 『富士吉田市史民俗調査報告書第9集 上吉田の民俗』
- 富士吉田市史編さん室 1990 『富士吉田市史民俗調査報告書第10集 下吉田の民俗』
- 富士吉田市史編さん室 1998 『富士吉田市史 史料編』第1巻 自然・考古
- 富士吉田市史編さん室 1992 『富士吉田市史 史料編』第2巻 古代・中世
- 富士吉田市史編さん委員会 1994 『富士吉田市史 史料編』第3巻 近世 I
- 富士吉田市史編さん委員会 1994 『富士吉田市史 史料編』第4巻 近世 II
- 富士吉田市史編さん委員会 1996 『富士吉田市史 民俗編』第1巻・第2巻
- 富士吉田市史編さん委員会 2000 『富士吉田市史 通史編』第1巻 原始・古代・中世
- 富士吉田市史編さん委員会 2001 『富士吉田市史 通史編』第2巻 近世
- 富士吉田市史編さん委員会 1999 『富士吉田市史 通史編』第3巻 近・現代
- 富士吉田市歴史民俗博物館 2004 『企画展 手機のある暮らし』
- 山梨県立博物館 2015 『シンボル展 天の虫のおきみやげ－山梨の養蚕信仰－』
- 山梨県立富士山世界遺産センター 2020 『富士山と養蚕－信仰の側面から－』